

編集後記

『総合政策』第6巻第1号をお届け致します。昨年度は新米編集委員長として、手探りをしながら何とか任務をこなしたという感じです。それでも、学会誌を4冊刊行できたことは、会員の皆様の御協力の賜物と感謝申し上げます。今年度は、去年の経験を生かしながら、さらに質の高い学会誌をめざして、微力ながら精進してまいります。引き続きよろしく願い申し上げます。

『総合政策』第6巻第1号の編集作業を進めている最中の6月6日、アメリカのレーガン元大統領死去（米東部時間6月5日）のニュースが届きました。エミリ・ディキンソンという詩人を研究するために、マサチューセッツ州にあります彼女の母校マウント・ホリヨーク大学に留学したのが、1979年のことでした。二度目の海外研修の機会を与えられ、ディキンソンの生地にありますアマースト大学に参りましたのが1988年です。この期間はまさしくレーガン政権（1981-1989）と重なります。「軍事力強化」や「小さな政府」を推進した政策の影響が社会のいたるところに散見されましたが、ニューヨークやロサンゼルスなどの大都会ならいざ知らず、人口3万人強の大学町でありますアマーストでも、バス停や公園にホームレスが数多くたむろしている光景を目の当たりにして大きな衝撃を受けたことを、つい昨日のことにように思い出されました。レーガン元大統領の死を扱った新聞記事には、「強いアメリカ」や「米ソ冷戦終結」などの言葉が踊っていますが、私は、今でも深く脳裏に焼きついている、ホームレスの人々の丸めた背中と重ね合わせながら、追悼文を読みました。

（佐藤智子）